

文化藝術懇話会 (67)

時： 2019-06-27 (木) 18.00-20.00

所： 淡路町ワテラス・レジデンス 2011号 (パーティ R)

人： 1987 古田武彦／倭人伝を徹底して読む、大阪書籍社

○漢籍 (分類) 経 史 子 集

○五経

順序: 詩 書 易 禮 (樂) 春秋 また易・書・詩・礼・樂・春秋

1 易経BC1700-BC1100 周 BC403-BC222 本来の名 易 また周易

2 詩経BC770-BC222 西周から春秋

3 春秋BC722-BC481

4 書経 (尚書) 最古の記録 殷周・春秋・戦国BC403-BC226 戦国以降・秦の穆公まで? -621BC

5 礼記*127-200 周秦の古書 前漢の戴聖 鄭玄ジョウゲン *らいき

○四書

論語 大学 中庸 孟子

○1987 古田武彦／倭人伝を徹底して読む、大阪書籍社

はじめに

*1984.04-1986.03、大阪朝日カルチャーセンター (中之島の朝日新聞ビル) 24回の講演をまとめた序 (p.3)

陳寿 大海という言葉、山島に居す

*出雲風土記、

*天皇家は後代の亜流 (三番手の後継者)、

*三国志の朝廷の語 倭人伝 これ以前の史書に書かれている。

第一章 「三国志」以前の倭 (ゐ) と倭人

「三国志」以前の倭と倭人

一 倭人の出現 (p.7)

- ・東方の夷 火を通さないで生で食べている。(礼記) 文身 (刺青)
- ・皮服の民 東夷、皮服す (尚経) 海曲、之を島と謂う。島に居るの夷。(尚書)
- ・日の出るところの人々 海隅 (かいぐう)、日を出 (い) だす。率俾 (そつび) せざるは罔 (な) し
率俾：中国の天子に臣下として仕える
- ・倭人の鬯草 (ちょうそう) 貢献：お酒にひたした香り草 (論衡)。屠蘇も、その一種か
成王の時、越常、雉を献じて、倭人暢を貢す (論衡)。BC1115-BC1079 *越常は南蛮
- ・東夷の音楽：成王の時 (BC1000頃)、味 (まい) は東夷の楽なり。叔父である周公に助けられので天子の礼楽を以ってせしむ。
- ・漢書の倭人：楽浪海中、倭人有り、分れて百余國を為す。歳時 (さいじ) を来たり献見すと云う (漢書)
班固／漢書、王充／論衡 同じ太学で学び、王充は五つ年長 貢献と朝見 (天子の都) は意味が違う。
- ・倭人と東鯤人：東鯤は、東の端っこの意 倭人：銅矛、銅戈、銅劍圈

二 箕子 (きし) と燕 (えん) (p.18)

殷墟が発掘され、架空ではなくなった。箕子は詩を読んでいる。従って、架空ではない。

- ・箕子韓国の成立 始皇帝 (BC246-BC210) の二世胡亥 (BC209-BC207) 三世嬰 (えい) (BC207) (古田) 箕子韓国と名付けた。朝鮮半島の南岸部に箕子韓国、北に衛氏朝鮮。
- ・倭は燕に属す 倭人の領域は、朝鮮半島の南岸部および、かなり奥地まで入った南岸部に及んでいる (山海経)

三 倭人の居所 (p.24)

光武帝の金印：志賀島から出た金印

倭人を見た班固と王充：

四 新たな課題 (p. 26)

- ・後漢書の信憑性：後漢書は三国志の後、同時代資料ではない。しかし、班固は、三国志にない新事実も書き加えている。
- ・堯（ぎょう）舜（しゅん）禹（う）の時代：周はBC1000-BC300、殷はBC2000+BC1000。夏は先殷期
- ・縄文中期の日中交流は？：BC10000 前後、(BC14000、神奈川大和市上野（かみの）遺跡)
- ・井戸尻の縄文土器：殷・周の時代に三本指の神、山梨と長野の境の井戸尻にも、同じような、更に古い三本指の神
- ・縄文時代の楽舞：能登半島で土製のお面。その倭人が夏の時代、舞踊を行った。事実とは言えないが、保留して記憶。
- ・東夷の中国大陸侵入：後漢書の事柄も、人間だけが中国に入り、文化は入っていないということはありません。

第二章 日本の文献にみる倭

一 新たな倭国の出現 (p.35)

- ・チクシかツクシか 現地ではチクシ
- ・邇邇芸命 古事記のニニギノミコト 筑紫に遣わされたのは主流、直系の子孫でない。本国の天国に兄、祖母の天照もいる。
- ・天津日高日子穗穗手見命を襲名する 穂穂手見命は高千穂の宮に伍佰捌拾（580）歳坐ましき。代々、同じ名前を襲名。
- ・波限建（なぎさたける： 天津日高日子波限建・鵜草草葺不合（うがやふきあえず）命
- ・地名が先か、説話が先か：産屋（うぶや）が出来上がらぬ内に生まれた 実ハ地名が先 説話は新しく、地名は古い7
- ・天皇に姓はないか：天（あま）という姓 鵜草草葺（うがやふき）という職業による姓
- ・職掌が姓になる：地名、職掌 鵜草草葺に似合わぬ素晴らしい息子
- ・四兄弟の旅立ち：鵜草草葺の職掌が下落していった。
- ・神倭伊波礼毘古命：かむやまといわれひこ 倭：本来「キ」の発音。 井原、井尻 このキがワに替わる（7世紀末-8世紀）
- ・倭と大和：弥生の近畿の人々は東鯤人。倭は、九州の分流。神武～開化の九代の天皇名中の倭、大倭はチクシの意。

二 「記」「紀」以前の倭 (p.49)

- ・大国主説話：倭が出てくるのは古事記。日本海が舞台。奈良は出ない。宣長は倭を「やまと」と呼び、奈良ととっている。
- ・天孫降臨の真相：大国古事記は筑紫—出雲—越、倭國へ上る 天照が大陸の金属器を使い、大国主命の主権を奪った。対馬海流では出雲から筑紫へ、海流は邇（さかのぼ）る（千歳竜彦さんの示唆）
- ・山田のかかし：かかし、稲を守る神
- ・大物主説話か？：大国主は一人では自信がなかった。故（かれ）、其の大年神… 海の光らしてやって来た。
- ・宣長の誤謬：御諸山は三輪山だから、この神は大物主神と解釈した。「其の」は直前の名詞。チクシの倭
- ・筑紫の青垣：倭ハ筑紫（ちくし）。福岡県鞍手郡小竹町に亀山神社（大歳大明神）、福岡の東の方。
- ・倭の多元化：倭を大和と決めてはいけない。他にも多元的にある。

三 伊場木簡の若倭部 (p.62)

- ・部民一元論に反対する：〇〇部 木簡は荷札。地名を全て部民に当てることは出来ない。
- ・神麻績（かみ・おみ）部と神人部：神は「渺としてとして遠い淵源をあまた含んでいるもの」
- ・浜名湖の倭：若倭部（わかわべ）（わかいべ）、近畿に出てこない。筑紫の倭ではないか。

四 常陸風土記の倭 (p.68)

- ・記紀の相違：倭部天皇 日本書紀の日本武尊は東北地方へ出かけ、やたら征伐する。景行天皇は古事記では九州へ行ってない。日本書紀では九州を巡回し遠征している。しかし筑前には立ち寄らない。追加、また削除
- ・大橋と弟橋：大橋比売命「倭より来る」、筑紫の倭の意。大橋を妃としている倭武天皇は日本武尊ではない。結論

- ・日本武尊は天皇ではない：帰途、三重県で不慮の死を遂げた。景行天皇がいたので、日本武尊は天皇扱いに出来ない。
- ・倭王武の常陸巡行：宋書の倭王武が筑紫にいる。倭王は雄略に一致しない。
- ・筑紫と常陸の関係：
 - 1 対馬海流、大陸から銅器・鉄器が最初に入ってくるのは越の国、また信州を通過して群馬に入ってくる
 - 2 利根川の上流が群馬。関東の下流域を襲撃した。

五 出雲と播磨の倭 (p.76)

- ・出雲經由越行き：常陸の倭が筑紫の倭、出雲の倭は、それ以上に筑紫の倭。
- ・官位の暴落：出雲風土記（八世紀半ば）の文責署名者がずらりと臣。これまで臣は最高位の姓（かばね）。額田部臣（六世紀の古墳から）
- ・「姓」本来の性格：神武の家来（大九米命）が目のあるところに入れ墨をしていて、不思議がられている。神武自身も入れ墨をしていた。若倭部、額田部。倭は筑紫の倭。
- ・混在する倭：播磨風土記は倭が、第一次の倭と第二次の倭が混在

六 初期天皇家の若倭と大倭 (p.81)

- ・大和盆地の若頭：九州の倭国の別国、大和における倭の新しい主である。
- ・倭よりの使者：使大倭という官職名
- ・倭人伝の「大倭」なり：筑紫なる中心権力からの派遣者、としての大倭。
- ・初期天皇家は筑紫の分家：橿原近辺にしか陵墓をおけなかった。九代目になって、盆地内の固めが終わった。若倭の意。

第三章 倭人伝以前の倭 (p.87)

一 松本清張 (1909- 1992) 説批判

- ・松本清張氏の提議：倭人（日本列島）と倭國（朝鮮半島）は別
- ・漢文の基本ルール：名前の次に出生地（郡県名）を書く。
- ・松本氏の盲点：魏志の帝紀に「倭国女王卑弥呼、使を遣わして奉獻す」
- ・読み方の順序：「韓は帯方の南に在り、東西、海を以て限りと為し、南、倭と接す」、陸地で接する意。韓、濊、倭は通貨制度がなく、通貨の代わりに鉄を使っていた
- ・414 好太王碑の証言：新羅は高句麗の好太王に、「倭が国境にやってきて脅かしている」と。倭の五王。倭人とは倭国の人である。結論
- ・なぜ倭人伝なのか：
 - 1) 楽浪海中、倭人有り（漢書、地理志）…と云う。周代の話
 - 2) 倭人鬻草を貢す（論衡、卷八）
 - 3) 倭人は帯方の東南大会の中に在り（三国志、倭人伝）
- ・新羅国王は倭人：瓠公（ここう）、本、倭人。初めて瓠（ひょうたん）を以て腰に繋ぎ、海を度りて来る。脱解、本、多婆那國の所生なり。其の国は倭国の東北一千里に在り。*これは短里
- ・多婆那國の舟：東鮮暖流 倭国は博多あたり。

二 東夷伝と濊（わい）伝にみる倭 (p.103)

- ・東夷伝序文：長老説くには、異面*の人有り、日の出ずる所に近しと。*異面：鯨面、顔に入れ墨 卑弥呼が景初二年、大夫難升米らを遣わして魏の明帝に朝獻す。陳寿は誇りをもって、倭人のことを記している
- ・濊伝のリアリティ：耆老（きろう）言う、風に遭い吹かるること数十日、東のかた一島を得。上に人有り。言語相曉（さと）らず。その俗、常に七月を以て童女を取りて海に沈む。*人身御供の少女を海に沈めた
- ・女神の島：宗像（むなかた）の沖ノ島 *昔は女の島、三女神
- ・水蛭子の話：項中復面有り … *シャム双生児
- ・海、北道の問題：海の北道 東鮮暖流（西亭子さん指摘）
号して道主貴と曰ふ：海の北道の安全を守る神 沖ノ島から出土した宝物は九州王朝か近畿王朝か

第四章 帯方の東南大海の中に在り

一 帯方の東南 (p.111)

・帯方の地：後漢の終わり、楽浪郡から帯方郡が分かれた。

好太王の碑：倭不軌侵入帯方郡 帯方郡は高句麗と倭の争点

316 西晋は、匈奴の侵入により滅亡 このため、空白地帯となった。

沙里院から博（せん）が出てきた。ソウルより遙かに西北。帯方太守・張撫夷の墓があっても中心ではない。

海の彼方に漁陽を望めるところだったか。つまり中心であるとは言えない。

・帯方の東南

- 1) 韓国を歴（ふ）るに、乍（たちま）ち南し、乍ち東し、其の北岸、狗邪（こや）韓國に到る。
- 2) （対海國）南北に市糶（してぎ）す。
- 3) （一大國）亦、南北に市糶（してぎ）す。
- 4) （末盧国→伊都国）東南陸行。
- 5) 《伊都国→奴國》東南。*傍線行程
- 6) （伊都国→不弥國）東行
- 7) 《不弥國→投馬／國》南

二 大海 (p.117)

・尚書にみる海：

四海 なぜ四になるか分からない。中国にとって海は東と南

海とあれば、東海を意味していた。周王朝は、黄河中流域を本拠にしていた。南海は後に認識が広がった

・海を知っていたか 海を知らない人もいた

・四海と海隅 尚書→魏志 長老云う、異面の人々。

・肅慎と日本の交流は：肅慎は北方民族で沿海州あたりを本拠としていた。

周の武王が殷を滅ぼしたので、肅慎氏、来賀す。

三 今使訳所通三十國 (p.126)

・使訳：前漢・武帝の時、張騫を西域に派遣し、名馬を求め、河源を窮めた

我が魏朝は、周王朝以来の神秘の国、東の倭の使者を到着させた。

「使」(し)を遣わす

・通ずる関係：中国の天子の家来になる。

後漢が禅譲という名で滅ぼされ、曹操が天子の位について魏朝を名乗った。後漢の献帝は殺されたとの噂。

公孫氏は、魏朝に従う必要はないと。

・大夏之属に通ずる：史記に張騫の西域の大宛列伝。現在では雲南省。当時は外国。

数万人の捕虜を得て、農業生産を増大させる。

倭人伝の場合でも、中心国一つに「通」ではなく、三十國と国交をもった。

・差錯問題：(差錯) さかく、入りみだれる、ごっちゃになる意。三十カ国が勝手に帯方郡へ朝貢した訳ではない
実際、倭国は女王が軍事力で、各國の統制をとっていた。統一権力と軍事力をもっていた。

三世紀は、出雲支配の時代ではなく、国ゆずりで、筑紫中心の勢力が確立していた。

・卑弥呼は三十國の代表：卑弥呼が上表分を書いた。貢物を付けて送った。文書に三十國の名前が書かれていた。

・三十國の國名：狗奴國は呉朝に朝貢していたか。漢が滅ぼされ、魏朝になったが、公孫淵は魏朝を認めていない。
三角縁神獸鏡、呉の工人が日本列島へ来ている。

・狗奴国と倭国の対立：難升米は率善中郎将（魏の官職名）を与えられている。

拜仮（はいか） 詔書と黄幢（こうとう、旗） 狗奴国は迂闊に邪馬壹國を攻められなくなる。魏を相手にする。
狗奴國は魏朝とは通じていなかった。

四 「狗邪韓國、倭地」論 (p.142)

- ・倭地五千里：海の上に散らばっている全領域。12,000-7,000 (帯方郡から狗邪韓國) =5,000 (倭地)
- ・任那日本府の問題：朝鮮半島の南岸部に倭地があり、それが狗邪韓國であった。

第五章 里程論 (p.147)

一 里単位の歴史 二里余、短里で180m

- ・赤壁の戦い：長江は支流の流れで加速される。このため、下流に行くほど速くなる。
川幅、400-500m (冬の乾季)、800m (夏の増水季)
- ・魏・西晋朝／短里説：一里=77m 周髀算經によると、76-77m (谷本茂)
- ・秦・漢の長里：文章の一部だけ抜き出すと、間違えることがある。
- ・古宝への復帰：周髀算經 (BC1000)、実際の星の運行を反映している。
- ・長里、再び：316 (建康4)、匈奴の劉曜が西晋を滅ぼし、東晋 (劉氏) を起こす。漢の高祖、光武帝に復帰。

二 史料対比の実証 (p.157)

史記の中の長里と短里：夏・殷・周は短里、秦・漢は長里、魏西晋は短里、東晋に漢の長里。

三国志を里程ぬきで読むことは出来ない。周の天子、方5,00里。楚、方、5,000里で、天子と同じ本拠。

三 南蛮伝の中の倭人伝 (p.162)

- ・夷蛮伝の里程：倭人伝は里程列伝ともいえるほど、里程記事がある。曹操は天子ではない、太祖。
倭人伝の里程は、大嘘。＜白鳥 (東京帝国大学)・内藤 (京都帝国大学) 共通の認識＞
- ・「韓地、魏領」問題：帯方郡治～女王國、一万二千余里。(帯方郡治～狗邪韓國が七千里+五千里)
- ・「二つの序文」問題：陳寿の保護者・張華が失脚したため、宙に浮いてしまった。その後、陳寿は没する。
張華を追いやった荀勗 (じゅんきょく) が政敵に倒され、范曄 (はんいん) が恵帝に上奏した。
このため、三国志の序文はない。しかし、陳寿は夷蛮伝に二つの序文を書いている。書に称す…
実際に倭国へ赴き、見て、記録した。これが三国志全体の結論ともいうべきもの。

四 里程列伝 (p.172)

- ・大宛列伝の里程 (史記)：張騫は大夏に行き、黄河の源を窮めた。
禹本紀の崑崙なる山は何処にもない。
- ・余里の理解：

五 陳寿の上表文 (p.176)

- ・三国志の災難：正史は完成すると、天子に奉呈し、上表文を述べる。
亡くなった陳寿の家に三国志がある。正史として採用していただくよう上表文を出した。
天子から詔が下され、官人が筆写した。
- ・諸葛亮著作全集：中国の歴史は煮ても焼いても食えない。司馬遷は史記の中で復讐している。
諸葛亮は、魏と対立した敵将。その事績の編纂をした。若い陳寿が選ばれた。よほどの見識を買われた。
著作全集を完成し、上表文の全文を収録してある。
- ・上表文の精神：三国志に上表文を書けなかった身代わりか。
- ・陳寿の上表文：諸葛氏集目録 … (三国志・蜀志、諸葛亮伝第五)

第六章 記された国名

一 夷蛮の固有名詞 (p.185)

- ・倭人伝の固有名詞：
- ・帝紀 (魏志) の夷蛮固有名詞：民族名称、また中国式一字名
- ・夷蛮伝の固有名詞：魏晋では、天子を指す臺 (だい) を夷蛮に使わない。

- ・韓伝の固有名詞：同じ名前が二度、出てくる。文字の音読、現代の漢和辞典の読みと、かなり近い。
- ・倭人伝の背景：卑弥呼の倭国は「鉄」の国。(弁辰) 其の瀆盧国、倭と接す。*倭地が朝鮮半島内にあった

二 九夷問題 (p.194)

- ・「爾雅」の(李巡) 九夷: 爾雅(じが)、もと周代に完成したか。周代の地名か。(後漢書より古い。後漢書にない)
 - 1、玄兕 2、楽浪 3、高麗 4、満飾 5、晃更(ふこう) 6、索家 7、東屠 8、倭人 9、天鄙
 隠岐島は島前と島後。島前の中の島は海士(あま)村、ここが天国(あまくに)の原点か。地名に天日(てんび)
- ・倭は真名井の「ゐ」: 井原、井尻 倭人な「ゐ」人という読み方、後に「にんべん」を付した。
 対馬の浅茅(あそう) 湾の北岸に和多都神社。そこの天の真名井という井戸。
 弥生の地名というより、縄文期の海人族の二つの拠点(隠岐島、対馬)
- ・九夷は実在した: 九つは、周代の地名、氏族名。
 後漢書・東夷傳、口夷、于夷、方夷、黄夷、白夷… *抽象的で自在の地名、氏族名ではない
 「論語」子罕(しかん)、「子(孔子)、九夷に居らんと欲す」。孔子は九夷という言葉を知っていた。

三 倭人傳と韓伝の国名 (p.199)

- ・記された三十の国名: 国名が出てくるのは、倭人傳と韓伝だけ。全体としての意味を掴む。
 通じている三十国、壹與(いちよ)の上表文に国々の名前が書かれていた。
- ・韓伝に現れた国名: 実際に通って確認した国々が書かれている。
- ・倭人傳は韓地陸行なり: 紹興本は手を加えている。韓伝は陸行であった。多くの国名が出て来る。
 「史記」西域の国々に卑字は使われていない。大国になった時、卑字が使われる。
 周は匈奴に追われて中国本土に逃げてきた。その周を殷が保護した。
 匈奴: 匈河水の種族 胡奴: 胡の種族 委奴(みど): 倭奴、倭の種族
 倭人傳の官名 倭人傳の固有名詞の読みは推定。
 呼: カ 狗: コ ヒミカ: 日甕、太陽の甕(みか) 筑後風土記に甕依姫 奴: ヌ

第七章 戸数問題 (p.215)

一 魏の制度としての戸

- ・倭人傳の戸と家 合計十四万六千戸と四千家
- ・落と家と戸: 混用している 確証のあるものだけを書いた。分からないものは書かなかった。
 北方民族は落が多い。
- ・魏志の邑と戸: 魏の時代 省、郡、県、邑、戸
- ・「戸」が出てこない: 蜀志は、戸が出てくるのは二ヶ所 魏志では多く出てきた
- ・魏の制度としての「戸」が強引に貫ぬかれている: 三国志の呉志、蜀志で、「戸」は消された。
- ・郡評論争: 大化の改新の詔勅、「郡」が出てくるので信用できない(井上光貞) 那須国造碑の金石文は「評」(評督)
 七世紀末まで評、八世紀に郡という単位が使われた。浜松の伊場遺跡から、「評」の木簡が出てきた。
 日本書紀、続日本紀は、九州王朝が使っていた「評」を隠した。人物の肩書きに「評督」と出てくる。
- ・戸と家の区別: 「戸」は税を取る単位、また軍事力を徴収する単位。倭人以外の人々がいた場合、「家」
 一大国、不弥国の場合、倭人以外の人々がいたので、「家」。
 三千許家: 許は前後の意
- ・夷蛮の地に戸なし: 史記、漢書では「戸」を使っていない
- ・「漢書」・地理志: 戸〇〇万、口〇〇〇万、県〇〇

二 戸数問題の副産物 (p.236)

- ・県の存在: 県(あがた)の成立 県風土記は九州王朝。郡(こおり)風土記は近畿王朝の命令。
- ・二つの風土記と二つの里程: 県風土記は短里(75m)、郡(こおり)風土記は長里(435m)
- ・万葉の短里: 八世紀、土地の人が「二十許里」、これは短里。長郷で約四里。短里が出ている。

第八章 劍・矛・戈 (p.241)

一 三国志に現れた劍・矛・戈

- ・劍・矛・戈：上級の人物は上殿の時でも、劍を持っていた。
柄のついた矛（ほこ）、遼東半島、朝鮮半島、日本列島で使われていた。中国大陸では戟（げき）。
刃が片方、刀。両刃は劍。（倭国）兵に矛・楯・木弓を用いる。
- ・中心は筑紫：細形銅劍分布図、青銅器分布図
- ・天子を守る矛：張飛が矛を横たえて、橋に立ち、蜀の劉備を逃した。劉備は妻子を捨てて、逃げている。
馬超は、劉備を玄德、玄德と呼んでいたの、関羽と張飛は杖刀（刀を杖のようにして）立っていた。
その後、玄德、おい玄德と呼ばなくなった。
杖刀（じょうとう）：將軍の姿勢 稲荷山鉄劍の金文字「杖刀人」
- ・矛は戦闘用具：主たる戦闘具、矛（ほこ）

二 戈（か）の時代

- ・戈を倒にす：殷の民衆は、武王の反乱軍に対して、戈を逆さまにして迎えた。（尚書、一カ所）
戈は柄の長い鎌の親玉のようなもの。つまり農具が武器になった。馬の足を払うのに最適。
- ・劍履（けんり）上殿（じょうでん）：諸侯が身につけていたのは劍で、矛や戈ではない（礼記）
- ・戈から矛への変化：戈は小隊長か部隊長が持っていた。三世紀になると、矛が主となる。
戈を振り回すと味方まで殺傷する危険があった。矛は槍のように、密集しても使えた。
- ・矛盾（むじゆん）と干戈（かんか）：矛（ほこ）は金属の中に柄をつける穴が開いている。中子（なかご）を作る。

三 出雲からの出土物

- ・三五八本の銅劍（出雲の荒神谷遺跡）：戈は、古く殷末周初の武器。矛は、周末から漢・魏の新しい兵器。
- ・出雲の時代の一断片：国ゆずり神話、出雲から筑紫に中心が移った。大国主命が国ゆずりを承諾した。
- ・八千戈（やちか）の神と八千矛（やちほこ）の神：劍でなく、矛や戈か
- ・劍は便宜上の用語：高橋建自／日本青銅文化の起源
銚は、本の方が袋になって柄を刺しこむもの。
劍は、本の方が刀劍のように莖（なかご）になっている。その莖が柄の方へ差し込まれる。
- ・劍は矛であり、戈である：
- ・実在の名称と学問上の名称：甕（かめ）棺と甕（みか）棺 卑弥呼（ひみか）は「太陽のミカ」
稲荷山鉄劍は刀（とう）、両刃が劍（つるぎ）、片刃は刀（とう）。

四 前期銅鐸の問題（出雲）

- ・先祖を祭る前期銅鐸：天子が祖先を祭り儀式に銅鐸が使われていた。（礼記）
鐸（たく）と一緒に中細劍が出土
- ・国ゆずりで、消えた銅鐸：神聖な中細劍が平劍へ発展したが、出雲では断絶している。
- ・斧（おの）の似合う天子：周代の天子 斧鉞（ふえつ）を操りて云々

第九章 銅鏡百枚

一 鏡の記録

- ・記紀にない鏡：特に汝に…銅鏡百枚…(魏志) 卑弥呼は天皇家の先祖ではない
- ・莫大な下賜品の背景：馬韓（韓国）は、楽浪・帯方郡と戦い、滅亡した。
- ・鏡を望んだ卑弥呼：後漢の獻帝が武帝を魏公にするとき、周代の前例にならぬ、鉄鉞
卑弥呼は太陽信仰で鏡を欲した。アマテル大神であった。八割りは博多湾岸から出土する。
- ・鏡と前方後円墳：アマテル信仰
(雁註) 糸島、博多湾岸に、前方後円墳はない。佐賀の岩戸山古墳は、衙頭（がとう）のある前方後円墳。

二 三角縁神獸鏡説 小林行雄

- ・三角縁神獸鏡：近畿に集中している。
- ・二つの疑問：三角縁神獸鏡は中国に出土しない。弥生遺跡に出土しない。日本列島で古墳時代に作られた。
- ・倭国特注説：小林行雄らの自己進化の理論。これは理解し難い。
- ・伝世鏡の理論：岩清尾山（いわせおやま）古墳の猫塚古墳（香川県高松市）（梅原末治）（古田）部分伝世はあるが、全面伝世は不可能
魏（二世紀）の夔鳳（きほう）鏡：福岡県春日市・須玖岡本、一世紀の弥生墓から出土（梅原）従来の私の発想は少し変えなければならない。
- ・考古学界を憂う：多くの考古学者は、三角縁神獸鏡は国産だと思っているが、それを言って貰っては困ると
- ・猫塚の荒廃：讃岐の石清尾山古墳 積石塚として有名だが、荒らされたまま。

三 弥生鏡*の銘文 *漢式鏡

- ・日と光の文字：弥生鏡は全部で60ほど、その殆んどが筑前中城
- ・弥生人は字が読めた：魏は、詔書を送ってきた。
- ・神聖なる日を映す：太陽信仰に関係している。
- ・蒼龍と白虎：後に四方となるが、当初は東西。
- ・仙人は桑を食す：筑前の卑弥呼、壹與は、蚕から絹織物を作っていた。
- ・崑崙山を知っていた：シルクロードの終点は、最初（弥生期）は、本来、北部九州に至る道。

四 立岩遺跡の舶載鏡

- ・詩にならない銘文：音韻が合わなくなっている。つまり、舶載鏡ではない。
- ・文字はデザイン：意味がわからない、つまり、文字は単なるデザイン。中国人が作った鏡ではない。
- ・国産鏡の等級：日本では権力の象徴として日本列島製の鏡が作られた。文字を読まなくてもよかった。太陽信仰の儀式の道具。中国では鏡は女性が日常愛用する日用品。良質の銅鏡もあれば、悪質もあった。

第十章 倭人伝の詔勅

一 日本初期の詔勅 (p.299)

- ・遺言の詔勅 日本書紀・雄略紀は隋書・高祖紀から採っている。年代から見ると、逆だが、書紀は盗作した
- ・人麿の本歌取り 二 倭人伝の詔勅 (p.302)
- ・三国志の詔勅 武帝・曹操は天子になっていないので、詔書はない。倭人伝だけ詔書が出てくる。
- ・卑弥呼に制詔す 制詔は天子の命令、天子のみことのみ。
制は帝王制度の命、詔は告令。また天子が勅を下す。制勅。卑弥呼は諸侯・王侯に準じて扱われている。
- ・制詔の意味 中国の制度の中に組み込まれる。たいてい「詔」で、「制詔」は、それ程、出てこない。

三 詔勅を深く読む (p.309)

- ・夷狄文字を識らず 鮮卑王は文字を知っていることを「親中國である」という証拠
- ・太后詔 詔勅の中に「大魏」とある。「大倭」も同様に理解すべき。

第十一章 朝廷の多元性

一 玉、珠、丹 (p.311)

- ・玉 玉（ぎょく）は崑崙山で採れる。曹操は、遺言で「葬る時、平常の服で、金銀珍宝を一緒に入れるな」
「喪乱以来、漢氏の諸陵、発掘されざるは無し。至りては乃ち、玉匣・金襴を焼き取り、骸骨並びに尽くす」
（魏志・文帝の詔勅） 璧（へき）：輪のようになった玉（ぎょく）
- ・珠 真珠
- ・丹（朱） 明帝も祖父・曹操が非常に質素で、贅沢なものは使わなかった。

・石車と磐船 いわふね、石を運んだ船の意。しかも石を攻撃用の投げ付ける装置。修羅（しゅら）は大きな石を運ぶソリ。

二 朝廷の多元性 (p.319)

- ・三国志の朝廷：漢の朝廷、魏朝、呉朝 前漢の朝廷も対象となっている。
- ・朝廷の多元性と西晋朝廷の不在：執筆時点の権力の中心・西晋を朝廷と呼んだ例はない
- ・朝廷を疑ってみる：出雲風土記に二回、朝廷と出てくる。この朝廷は出雲朝廷か大和朝廷か
- ・二つの朝廷：国造り（くにづくり） *くにもみやつこ、と暗記してきた 叙述の大穴持命と孫二人の場所を朝廷と呼んでいた。大和朝廷ではない。出雲、筑紫、大和、それぞれ朝廷
- ・国を造り、国をゆずる：大国主命は大和朝廷に国をゆずったわけではなく、筑紫に天孫降臨した邇邇芸命（皇御孫命）に譲った。出雲中心の支配を完成したことを国を造ったと表現している。
- ・三津郷の大国主：大穴持命の子供が口が利けず、夢で願った。
銅の精錬で鉱毒が流れていたか。銅利器（出雲矛）を大量に生産していた。

参考書（包括的）

- 1 三品彰英／邪馬台国研究総覧
- 2 佐伯有清／研究史 邪馬台国
- 3 佐伯有清／邪馬台国基本論文集 *邪馬台国が正しいと考えている。
- 4 安本美典／邪馬台国ハンドブック *甕（みか）依姫を取り上げていない。ハンドブックにならない。

研究論文摘要

- 1 松下見林／異称日本伝 金印・ヤマト（大和）の地にあると信じた。金印は九州志賀島
- 2 新井白石／外国之事調書 晩年、ヤマトから九州、九州説、筑後の山門（やまと）郡 本居宣長
- 3 白鳥庫吉／倭女王卑弥呼考 九州説／筑後また肥後の山門 里程に約五倍の誇張あり（短里を知らなかった
- 4 内藤湖南／卑弥呼考 大和の地名、官名、人名に比定した。*版本を探った
- 5 高橋健自／考古学上より観たる邪馬台国 古墳墓の多い地、漢魏の鏡・出土の多い地。大和
*卑弥呼の墳墓、径百余歩（435m） 長里で計測してしまった。実際は短里（25m）、100歩x25cm=25m
- 6 三宅米吉／邪馬台国について 倭（ヤマト）に従属する国として、奴（な）国を考えてしまった。
*委奴（みぬ）「み」の（人々）国
- 7 橋本増吉／邪馬台国の位置について 卑弥呼の径は円形を意味している。前方後円墳は当たらない。
*筑後山門説を採ったが、山門は円墳の密集地でもないし、鏡、錦の密集地でもない。文献と考古学は別の学問
- 8 梅原末治／考古学上より観たる上代の畿内 青銅器から鉄器へ。三世紀、鉄器文化の中心は大和。しかし、三世紀、近畿には金属器がない。銅矛の実物、鋳型は出土していない。大和が前方後円墳の最古型と称していたが、近年、小郡市の津古生掛けに出現している。
- 9 笠井新也／卑弥呼の冢墓（ちょうぼ）と箸墓（はしはか） 全長230m、後円径150m
*径を前方後円墳の円墳部と限定、ただし短里（卑弥呼の墳墓、100歩=25m）を考慮していない。
- 10 榎一雄／魏志倭人伝の里程記事について 全里程を合計すると10,500里。
*1500里は伊都国から邪馬台国まで 唐六典に1日の歩行・50里から、30日は1,500里になると計算。
三国志と唐六典が同一の単位であることが前提。短里と長里では成立不可能
- 11 小林行雄／邪馬台国の所在論について 鏡は手ずれで伝世される。三角縁神獸鏡（四世紀以降の古墳）こそ魏朝から卑弥呼に授与された鏡であると。確かに部分的には伝世もあるが、全三角縁神獸鏡が三世紀に齋（もたら）されたとするには無理がある。しかも中国から一枚も出ていない。国産銅利器は筑後になく、筑前中域である。
- 12 植村清二／邪馬台国・狗奴国・投馬国 九州説とすれば、筑紫郡を中心に、糸島（福岡西部）から神崎（佐賀県北部）に及ぶ領域以外にない。
あとがきに代えて 中山千夏さんとの往復書簡
資料 倭人伝・読み下し文 以上